

主 題：主よ、祈りを教えてください

聖書箇所：マタイの福音書 6章9－13節

弟子たちがイエス・キリストに「主よ、祈りを教えてください」と問いかけました。そして、主は教えられました。「主の祈り」と私たちは聞いています。イエスが弟子たちに教えられたその祈りを、私たちは前回から学んでいます。もう一度私たちがしっかり覚えておきたいことは、**祈りの目的は神をあがめることである**ということです。この祈りも神の栄光のために捧げるささげ物であるということを忘れてはなりません。自分の欲しいものを手に入れるための手段ではないと前回は見ました。それが祈りの目的ではありません。自分の願いがかなうことが祈りの目的でもありません。自分が幸せになったり、自分の心が平安に満たされることが祈りの目的でもないのです。何のために祈るのか、それは祈りを通して主があがめられることです。主がほめ称えられることです。この神がどんなにすばらしいのかがあがめ称えられること、それが祈りの目的であることを前回学びました。私たちが祈りをするとき覚えておかなければならないことは、正しい態度をもって祈ることです。何を祈るかよりも、どのような態度で祈るかです。それを前回見たのです。

1. 神の前にへりくだって畏敬の念をもって祈ることが必要
2. 感謝と喜びをささげること
3. 服従の決意をもって主の前に立つこと
4. 信頼をもって主の前に立つこと
5. 期待をもって主の前に立つこと

このような心の態度が祈りにおいて最も大切なものであると学びました。この五つのことをまとめるなら、祈りは神に対する礼拝、神をあがめる機会だということです。前回はこの祈りの中の前半の三つを見ました。神の栄光に関する祈りです。

1. 主がどんなときにも誉め称えられるように 9節
2. 主をあがめる者たちが増やされるように 10節
3. 主の御心を求める者たちが増やされるように 10節

今日は後半の三つの祈り、これは人の必要に関する祈りと呼びますが、その三つを見て行きます。これも、前半の三つも、すべて神をあがめるものです。

#### **人の必要に関する祈り**

#### 4. 主にすべての必要を求める 11節

11節には「**私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください。**」とあります。これは主にすべての必要を求めなさいということを教えているのです。「糧」が食べ物であることは明らかです。私たちが生きて行くために必要なものです。からだの成長のために必要なものです。そして同時に、神を信じた者として霊的な糧も必要です。しかし、ここでは肉の必要についてだけ説明します。イエスはここで、私たちが日々生活して行くために必要なものを神の前に求めなさいということを教えたのです。私たちはこの必要を得るためには、当然、まず働くことを考えます。仕事をしなければ食を得ることはできないと。でも、イエスはそれに加えて祈ることを教えられたのです。一生懸命仕事をしなさいと言われたのではありません。すべての必要を主に求めなさいと言われました。よく考えてみると、私たちはこのような祈りをしません。私たちは「神さま、今日の食べ物を与えてください」と祈るのでしょうか？なぜなら、私たちの冷蔵庫には食べ物がいっぱいあるからです。私たちの貯金通帳にある貯金を見るなら、別に今日の食べ物を神に求めなくても、今日の必要は与えられるからです。たとえ、今日の糧のために祈ったとしても、私たちの祈りはほんとうにそのことを心から願って信じて祈るような祈りではないのです。ある人は思うかもしれませんが、イエスが話された当時、弟子たちは貧しかったから、この祈りは貧しい生活をしている人のための祈りだと。実はそれは大きな間違いです。食べ物がいっぱいあり、貯金もある私たちに対しても、神は大切なことを教えようとしておられるのです。なぜ、イエスはこのような祈りを教えようとしたのでしょうか？それは、この祈りによって私たちがますます神をあがめる者として成長するためです。この祈りによって、私たちは神の前にへりくだって行きます。なぜなら、私たちが「日ごとの糧を、今日生きて行くためにすべての必要を与えてください」というとき、私たちは今日生きて行くためのすべての必要を神に依存していることを認めていることになるからです。私たちの問題というのは自分の力で生きてると過信していることです。どうして仕事ができるのでしょうか？健康が与えられているからです。なぜ事故に会わないのでしょうか？神が守ってくださっているからです。もう

私たちが知っているように、どんなに健康に注意しても病気になります。どんなにからだに注意をはらっても私たちは死を迎えるのです。もちろん、健康を保つことは必要なことですが、私たちが気付かなければいけないことは、自分のいのちも、日々食しているものもすべて神の恵みだということです。冷蔵庫にある食べ物も、貯金通帳にある貯金も全部神が私たちに一方的に与えてくださったものなのです。そのことを忘れてしまうと感謝がなくなるのです。だから、私たちは食べ物についての感謝もどれほど神に感謝しているのかを問われると絶句します。神を知らない人々なら、農家の人に感謝したり両親に感謝したりします。私たちも神さま感謝しますといいながら、実は自分がかんばったからと自分を自慢していませんか？私たちは今日の生活のために神の助けがいること、神に依存していることをしっかり覚えなければならないのです。そうするなら、私たちは日々与えられるすべてのことについて神に感謝をささげる者になって行きます。そして、神が与えてくださっているものを見るとき、これからも神は与えてくださると期待を置くものとなって行きます。このような豊かな国にある私たちに、どの時代であっても、どの国にあっても、私たちが神の恵みで生きていることをしっかり覚えることが大切だと教えているのです。私たちは高慢になっていませんか？神に頼らずに人間に頼っていませんか？私たちに今一度必要なことは「私たちの日ごとの糧を今日もお与えください、私の必要をどうぞお与えください」と、神の前に謙虚にへりくだった心の態度です。これこそ神が喜んでくださることであると、ここでも主ご自身が教えておられることを私たちは見るのです。日ごとの糧、私たちに必要なものが与えられなくても、私たちが主の最善がなされていることを信頼して感謝するのです。このようにして私たちが主をあがめ、主にほめ歌をささげ、礼拝するのです。「日ごとに」とイエスが言われたことは、今日の必要が与えられたことを今日感謝するということです。そして、これを日ごとになすようにと言われるのです。

## 5. 主に自分の罪を告白する 12節

12節に「**私たちの負いめをお赦しください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。**」とあります。この祈りは主に罪を告白するということです。「負い目」ということばを辞書で引くと「借り、借金、負債」という意味があります。A・T・ロバートソンというギリシャ語の学者は「この負い目というのは、神に対する道徳的、霊的負い目である」と説明しています。人間に対するものではなく神に対するものだと言います。イエスはここで何を言っておられるのでしょうか？神に対する負い目を赦してくださいというと、ある人はこう思うかもしれません。これは罪の赦し、救いのことを言っていると。もし、そうならみことばの中に矛盾が生じてきます。というのは、罪の完全な赦し、つまり、救いというのは一度きりのものだからです。何度も罪を赦していただいて救いを何度もいただかなければいけないとか、救いを失ってしまうのではないかというのは聖書の教えではありません。旧約聖書のエレミヤ31章でイスラエルとユダの家に対して預言者はこう言います。31：34b「**わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さないからだ。**」と、神は罪を完全に赦すと言われるのです。パウロはローマ8：1で「**こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。**」と述べています。私たちが神に感謝することは、イエス・キリストを信じ罪赦された私たちは、二度と罪のさばきを受けることはないということです。完全に永遠に私たちは救われたのです。そうするとこの12節でイエスは何を教えておられるのかです。救いのことでないとするなら何のことを話されたのでしょうか？それは、きよめのことを言っておられるのです。日々犯す私たちの罪の赦しのことです。私たちが残念なことに、イエスを信じた後も罪を犯す者です。ヨハネ第一の手紙1：8でヨハネはこう言います。「**もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにありません。**」と、10節にも「**もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにありません。**」とあります。ヨハネが教えていることは、イエスを信じた私たちクリスチャンも罪を犯すということを私たち自身も知っているし、神もそのことをご存じだということです。私たちクリスチャンは罪を犯すたびに大きな悲しみを抱きます。大きな失望を抱くこともあります。神の前に正しいことをしたいと思っているのに、私たちがしていることは神に喜ばれることではなく罪を犯すことです。どんなに強く正しいことをしたいと願っても、私たちの行ないは罪が多いのです。救われる前の私たちは罪だけを行なっていました。神の前に正しいことをしましようという思いは全然なかったのです。私たちは自分を楽ませるために何をするのかと、自分の好きなように生きていました。しかし、イエスを信じたことによって、私たちには神に喜ばれることをして行きたいという新しい思いが与えられて、そのように生きて行こうとするのです。クリスチャンとそうでない人の大きな違いはここにあるのです。しかし残念なことに、常にそのようなことが実践できるわけではありません。私たちはどうすればいいのでしょうか？さきほど見たヨハネの手紙の8節と10節の間にある9節にはこのようにあります。「**もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。**」、ヨハネは私たちが罪を犯したときは、それを主の前に告白しなさいと教えている

のです。主の前に言い訳するのではなくて、主がご覧になるように、主が言われるように私たちもそれに同意して認めることであると言います。ですから、この12節でイエスが教えられたことは、まず私たちが主の前に立つときに、自らの罪を主の前に告白することです。私たちが祈るとき時に必要なことは、その心の中に潜むすべての罪を告白することです。そして、私たちがその告白をするなら、主は何度でも赦し続けてくださるのです。旧約聖書ネヘミヤ書の9：17に、イスラエルの民が主の前に立ち、そして、彼らが神の前に罪を悲しんでいるときの様子が記されています。「彼らは聞き従うことを拒み、あなたが彼らの間で行なわれた奇しいみわざを記憶もせず、かえってうなじをこわくし、ひとりのかしらを立ててエジプトでの奴隷の身に戻ろうとしました。」「かえってうなじをこわくし」とは「頑なに」とか「強情に」という意味です。つまり、イスラエルの民がエジプトを出て来てから、どのような態度を神の前に取ってきたかということに彼らは回顧するのです。神のすばらしい奇跡を見て来たにもかかわらず、彼らは物事が自分の思うように進まなければ神の前に心を頑なにしましたのです。神に対して怒りをもったのです。その罪を彼らは思い出すわけです。そして、その後でこう言うのです。「それにもかかわらず、あなたは赦しの神であり、情け深く、あわれみ深く、怒るのにおそく、恵み豊かであられるので、彼らをお捨てになりませんでした。」と。イスラエルの罪、それは大変な罪でした。繰り返し繰り返し犯したのです。しかし、神はそのすべての罪を赦し続けてくださった、そのことをイスラエルの民はここで告白するのです。感謝なことに、私たちの神はこのイスラエルの民の罪を赦し続けられたように、私たちの罪も赦し続けてくださるのです。もちろん、罪を告白しなかったら私たちは永遠の地獄に行くのではありません。しかし、私たちが罪を告白しないなら、罪をもったままで歩むなら、私たちは神から約束されている祝福を失うのです。この地上にあって、私たちは喜びをもって感謝をもって、神の平安をもって歩んで行くことができるし、そして、何よりも私たちが救われ生かされている目的である神の栄光を現わすことができるのです。しかし、罪がそれを邪魔するのです。だから、私たちは罪を神に告白しながら生きて行くことが必要なのです。私たちは自らの罪を告白して神にきよめていただいて神の前に立つことが必要であることを教えているのです。

12節の後半を見ると「**私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。**」とあります。つまり、イエスはここで人を赦す大切さを教えているのです。人を赦すことは神に赦しを求めることと同様に、大変重要なことです。神の前にさまざまな罪を告白するというのはそれほど難しくありませんが、人を赦すことはとても厄介なことです。私たちはなかなか人の罪を赦すことができないのです。いろいろな罪がある中で、イエスがあえてこのことをここに挙げられたのは、それが私たちにとって最も難しいことだからです。すぐ人に対して腹を立てたり人間関係のこじれなど、世の中でもそうだし、悲しいことに教会でもそうかもしれないのです。イエスが教えてくださっているのは、そのような人を赦すことのない怒りをもった心が罪だということです。マタイ5：21-26でイエスはこのように言っておられます。「昔の人々に、『人を殺してはならない。人を殺す者はさばきを受けなければならない。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。：22 しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に向かって『能なし。』と言うような者は、最高議会上に引き渡されます。また、『ばか者。』と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます。：23 だから、祭壇の上に供え物をささげようとしているとき、もし兄弟に恨まれていることをそこで思い出したなら、：24 供え物はそこに、祭壇の前に置いたままにして、出て行って、まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい。それから、来て、その供え物をささげなさい。：25 あなたを告訴する者とは、あなたが彼といっしょに途中にある間に早く仲良くなりなさい。そうでないと、告訴する者は、あなたを裁判官に引き渡し、裁判官は下役に引き渡して、あなたはついに牢に入れられることとなります。：26 まことに、あなたに告げます。あなたは最後のコドラントを支払うまでは、そこから出ては来られません。」、イエスが言われているのは、供え物、ささげ物をするよりももっと大切なことがある、罪を告白することだということです。罪からきよめられることです。ここでイエスは「兄弟に向かって」と言われました。これはクリスチャンだけを指しているのではありません。それ以外の人も含むのです。腹を立てる、つまり、根にもっている怒りです。心の中にずっと持ち続けている「どうしてもあの人だけは赦せない」とか「どうしてもあ的人是嫌いだ」という怒りです。いつまでも覚えていて忘れようとしないう怒り、妬みであったり、恨みであったり、和解を拒むだけでなく何とか復讐しようとする怒り、このような怒りが殺人へと発展するのです。殺人は大きな罪です。しかし同時に、このような動機、人に対して怒りをもつというこの罪に対してイエスは言われたのです。わたしはそれを嫌う。ですから、この22節に「最高議会上に引き渡される」とか「ゲヘナに投げ込まれる」とあるのは、神がどれほどその罪を憎んでおられるかを明らかにしたのです。もし、私たちが今日こうして礼拝に集まってきたときに、だれかに対して怒りをもったまま来ているとしたら、私たちのささげている礼拝は神に受け入れられないのです。祝されません。神の栄光を現わすことはできません。99%正しいことをしていても、もしそのような怒りが私たちのうちにあるならば、まずそれを解決しなさい、それから主に供え物をさ

さげなさい、主を礼拝しなさいと言われるのです。人に対する怒りは非常に大きな罪だとイエスは指摘しておられるのです。パークレーという神学者はこのように言います。「人と和解するまでは神と和解することはできない。我々はときどきなせ自分と神との間に間隙があるのか、なぜ祈りが聞かれないのかと不思議に思う。それは我々が兄弟と対立し、あるいは誰かを傷付けたまま贖いをしていないために、彼との間に壁ができてしまっているのではあるまいか」と。もし私たちが人と和解をしていなければ、神の前に喜ばれていないことを覚えなければなりません。私たちが和解しようとしても相手が拒むかもしれない、それはその人たちの問題です。しかし、少なくとも私たちの心の中に人に対する怒りをもってしているなら、それを神に告白して赦していただくことです。イエスがなぜこのことを取り上げられたのでしょうか？人を赦すことが余にも難しいからです。なぜ、私たちは人を赦すことができないのでしょうか？それについてイエスは一つのたとえをもって大切なことを教えておられます。マタイ18：23-34です。「このことから、天の御国は、地上の王にたとえることができます。王はそのしもべたちと清算をしたいと思った。：24 清算が始まると、まず一万タラントの借りのあるしもべが、王のところ連れて来られた。：25 しかし、彼は返済することができなかつたので、その主人は彼に、自分も妻子も持ち物全部も売って返済するように命じた。：26 それで、このしもべは、主人の前にひれ伏して、『どうかご猶予ください。そうすれば全部お払いいたします。』と言った。：27 しもべの主人は、かわいそうに思って、彼を赦し、借金を免除してやった。：28 ところが、そのしもべは、出て行くと、同じしもべ仲間で、彼から百デナリの借りのある者に出会った。彼はその人をつかまえ、首を絞めて、『借金を返せ。』と言った。：29 彼の仲間は、ひれ伏して、『もう少し待ってくれ。そうしたら返すから。』と言って頼んだ。：30 しかし彼は承知せず、連れて行って、借金を返すまで牢に投げ入れた。：31 彼の仲間たちは事の成り行きを見て、非常に悲しみ、行って、その一部始終を主人に話した。：32 そこで、主人は彼を呼びつけて言った。『悪いやつだ。おまえがあんなに頼んだからこそ借金全部を赦してやったのだ。：33 私が おまえをあわれんでやったように、おまえも仲間をあわれんでやるべきではないか。』：34 こうして、主人は怒って、借金を全部返すまで、彼を獄吏に引き渡した。」、王の一人のしもべは王に1万タラントの借金をしていました。日当が1万円と単純に計算するならこれは6000億以上の借金を負っていたということです。その人物は王の前に出てきたとき「どうかご猶予ください。そうすれば全部お払いいたします。」と願います。その主人は「かわいそうに思って、彼を赦し、借金を免除してやった。」のです。「ところが、そのしもべは、出て行くと、同じしもべ仲間で、彼から百デナリの借りのある者に出会った。」先ほどの計算で行くなら100万円です。「彼はその人をつかまえ、首を絞めて、『借金を返せ。』と言った。」のです。すると、この仲間はしもべが王にしたのと同じように『もう少し待ってくれ。そうしたら返すから。』と猶予を求めます。しかし、彼は承知せずにこのしもべ仲間を牢に投げ入れてしまうのです。そのとき、王はこのように言います。「悪いやつだ。おまえがあんなに頼んだからこそ借金全部を赦してやったのだ。：33 私が おまえをあわれんでやったように、おまえも仲間をあわれんでやるべきではないか。」と。イエスが大切なことを話されたのです。なぜ私たちは人を赦すことができないのでしょうか？自分が赦されたことを忘れていたなら、人を赦すことはできません。私たちが人を赦すためには自分が赦されたことを覚えなければなりません。そして、自分は罪人のかしらであることをしっかり覚えておくべきです。人から言われなくても自分自身を真剣に見つめたときに、自分がどれほど醜く、どれほど汚れているかがすぐに気が付きます。そして、それを考えるほどに私こそが罪人のかしらであると告白するはずで、もし、私たちがほんとうの自分の罪深さに気付いているなら、こんな私を神が赦してくださったことを覚えるとき、私たちは私たちに対して罪を犯す者を赦すことができるということです。それがこのたとえでイエスが私たちに教えられたことです。考えてみてください。人が私に対して悪口を言うかもしれません。しかし、私がこれまで主に対して言ってきた悪口はどれほどひどいものだったかです。私たちはみことばを聞いたときに、神に対して「あなたなんて信じる価値がありません」と言い続けたのです。この方が神であり救い主であり、この方が救ってくださると分かるなら、罪を赦していただけるのですから、私たちは喜んでこの救いを受け入れるはずで、私たちが受け入れないのは必要ないとするからです。どれほどの主に対する悪口でしょう。私たちが神に逆らい続けたことは、何にも勝る大きな悪、罪ではありませんか？人が私に対して犯す罪など比較にならないのです。それを神は赦してくださったのです。それを私たちが覚えるとき私たちは人のなす罪を赦して行くことができるのです。

もう一度6章に戻って、イエスはここで罪の告白をするように教えられました。なぜでしょう？この祈りが教えられたのも私たちが神をあがめる者とますますなっていくためです。私たちが礼拝者として成長していくためです。私たちが「罪をお赦してください」と主の前にへりくだるときに、私たちはこんな私を赦してくださった神に、感謝をささげることになるからです。そして、私たちが神の前に罪を告白し続けることによって、神の前にへりくだらされて、砕かれて行くことをイエスは私たちに教えようとしておられるのです。

## 6. 主に助けを求める 13節

どんなときでも主に助けを求めて生きることです。13節には「**私たちを試みに会わせないで、悪からお救いください。**」【**国と力と栄えは、とこしえにあなたのもものだからです。アーメン。**】とあります。「試み」とは神からのテストです。私たちの信仰を強めようと神は私たちに「試み」を与えてくださるのです。それによって私たちの信仰が成長して行くのです。私たちが神にとって役に立つ者となって行くのです。しかし同時に、神が私たちが成長するようにと与えてくださったテストが、肉によってサタンによって利用されて、罪を犯す機会となってしまいう危険性があるのです。たとえば、あなたはクリスチャンとして職場にあって一生懸命主のために働いて来られた、ところが仕事を失ったとします、リストラにあったと、そうすると私たちクリスチャンは主の前にどう思うでしょう？私は主の前に精一杯してきた、そしてこのような結果が訪れた、神はこれをよしとされたのだ、それではこれから神は私の必要をどのように満たして行ってくださるのでしょうか？そのことを期待して行きましょうと、私たちはここから大切なことを学ぶのです。つまり、神に信頼するということです。ところが、失職したときに「なぜ神さま、私をこのような目に会わせるのですか？これから先不安ばかりです、どうしてこのローンを払うのですか？どうして生活して行くのですか？なぜあなたは私のことを愛しているといわれたのに、どうしてですか？」と私たちが思い始めるなら、せつかく神が与えてくださった大切な学びの機会が、神に対して罪を犯す機会となってしまいますのです。イエスは誘惑の力がどれほど大きいかをご存じです。イエスご自身が誘惑に会われたからです。罪を犯されなかったけれど、誘惑を経験なさったのです。同時に、サタンが非常に狡猾であることもご存じです。これは私たちも経験していることです。だから、私たちには神の助けが必要なのです。いつも私たちは神の助けをいただきながら歩んで行くことが必要なのです。

なぜイエスはこのような祈りを最後に与えられたのでしょうか？この祈りを通して私たちが神をあがめる者として成長して行くためです。この祈りによって私たちは再び神の前に砕かれて行くのです。主の前にへりくだって行くのです。なぜなら、「神さま、試みに会わせないで悪から救い出してください」と私たちが言うときに、「神さま、私は助けが必要とする者です」と、そのような弱い者であることを神の前に認めるからです。私たちはそのような生き方をして失敗に失敗を重ねているだけというのは、経験で学んでいます。イエスが教えられたことは、「神さま、私はあなたの助けが要ります。私がどんなに頑張っても、どんなに強い意志をもっても、この誘惑に対して、サタンの試みに対して、自分の力で勝利することはできない、あなたの助けが要るのです」と覚えることです。ですから、私たちがこのような祈りをするとき、自分がどれほど弱く神の助けが必要かということをしっかり覚えるのです。

この三つの祈りを後半に見てきましたが、すべてに共通していたことは、この祈りを通して私たち自身の目を自分の本当の姿に向ける祈りです。私の日々の必要に関して助けが要ります、毎日の生活に必要なものをどうぞ与えてくださいと。神さま、私は自分の罪深さを見るとき、ほんとうに救いに値しない者だということが分かります。このような者を赦してくださいありがとうございます、私は救われる価値のない者です、まさに罪人のかしらです。神さま、私は弱くてサタンの試みや罪の誘惑に対して、自分の力で打ち勝つことのできない者です、主よ、どうぞ助けを与えてくださいと。

このように、この三つの祈りというのは、自分がほんとうはどのような存在なのかを私たちに悟らせてくれるのです。私たちは日々、この方の前に必要を求めて祈ることです。私たちは罪が赦されたことを覚えながら感謝して生きることです。そして、神の助けを求めながら生きて行くのです。この13節の最後に【**国と力と栄えは、とこしえにあなたのもものだからです。アーメン。**】と記されています。神への称賛で終わります。それはこの神が称賛をお受けになるのにふさわしいお方だからです。これまでの祈りを全部見て私たちが教えられたことは、この祈りはすべて神をあがめるものです。あなたはすばらしいお方だ、あなたはすべてのものによって称えられるのにふさわしいお方だ、あなたは完全なお方だ、私の必要をご存じでそれを与えてくださるお方だ、私の罪を赦し人を赦すことができるように私を助けてくださるお方だ、しかも、様々な誘惑に対してそれに勝利を与えてくださる、それに必要な力を与えてくださる、だから、私はあなたを称えますと。この祈りを見たとき、どこにも利己的な祈りは記されていません。この「主の祈り」というのをある人々は暗記していつも唱えることをします。でも、イエスはそのようにしなさいとこの祈りを教えてくださったのではありません。もし、そのように教えるのなら、最初に見たように、ルカの福音書11章に並行箇所がありますが、それと比較してください。ことばが違います。このことばを覚えていつもこれを唱えることを教えているのなら、同じことが書かれているはずですが。イエスの関心は、私たちがただ同じことばを繰り返すことではありません。イエスが望んでおられることは、私たちの心が神の前に砕かれた謙虚な心で、そのような心で主を見上げ主をあがめるその態度です。だから、毎日何回祈るとか、何時間祈ったとか、断食して祈ったとか、そういう外面的なことよりも、主の前にへりくだってほんとうの自分を見つめて、このような自分に与えられている日々の恵み、赦しを感謝して、心をからの悔い改めをもって、主をあがめ礼拝するなら、その祈りを

通して主があがめられて行くのです。それが私たちの願いです。

どうぞ、主をあがめてください。あなたの祈りをもって…。あなたの必要は神がご存じです。そして、必ず必要は与えられます。あなたが長く必死になって祈ったからではありません。そのことを主にゆだねて与えられている恵みをしっかりと覚えて主をあがめることです。そのときに主が喜んでくださるのです。そのような祈りをもって、私たちの偉大な主をあがめ続けて行くことです。